

原 著

倫理規範と人間の実存的構え

関 谷 真

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成10年11月11日受理)

Ethical Norms and Human Existential Foundations

Makoto SEKIYA

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-0193, Japan
(Accepted Nov. 11, 1998)*

Key words : ethical norms, ethical order, foundations of human, existence

Abstract

Ethical norms work in the communal phenomena of human activities. 'Communal' means a gathering of people acting in concert, in which there are found certain rules working in common consciously or unconsciously among people related to each other in some way. The simple rule, for example, is that even when we walk on the street, we avoid crashing into other pedestrians intentionally so that abusive collisions don't occur. This rule is trivial and yet inviolable.

But from the viewpoint of human existential foundations, the concept of such a simple rule has much import. Such rules in human gatherings amount to the appreciable and ulterior ethical rules which bring order to the world in which we live. They are called ethical norms.

Human existential foundations, which are *a priori* to human existence, explain the order of human life and human common sense which provides the universal norms of human conduct and ethical judgement in our everyday life.

要 約

倫理規範が人間世界にあることははっきりしている。人が集まるところにルールがあるこ

とも分かっている。例えば、日頃自由に道路を歩くが、自由にとっても決して無駄に人にとやたらにぶつかったり、わざわざ体当たりすることもしない。そうしないと皆思っている。これはルールであり、些末な無価値なルールかもしれない。

しかし、人間の実存的なあり方からすれば、この簡単なルールそれ自体がさらに深い広い人間の共同体に働く規範の原形であると言ってよい。人の集まりは複雑で多様であるが秩序はあるのである。そのことを踏まえて人間の実存性を考える。

現実の世界で人間が具体的活動を行う際に、そこで働く秩序と価値的判断をもたらすような人間の実存的な構えについて論じ、それが人間の世界という場の倫理的規範の由来を説明できると考える。

はじめに

倫理学というと堅苦しい学の体系を思い浮かべるけれども、ここではきちんとした体系としてではなく、一つの知的な考察の内容をもった学として扱った場合について考えてみたい。

まずいえることは、倫理的な考察は当然に善なることとそうでないことを判断する基礎的な考察方向をもっていることは前提である。しかし、善なるもの悪なるものの個別事象のリストを作るのではない。そうではなくて、そういう判断をすることが人間のあり方として根底にあって、われわれがわれわれの世界で如何に行動しているのかを探求するのである。

それと同時に、他の学問に必ず登場する理論や理論モデルを創り出すのでもない。つまり、できごとの法則を見いだしたりするわけではない。

判断には判断する主体としての人間と判断の根拠としての判断基準がある。規範といわれるものである。但し、判断基準はきちんとしたかたちで言葉になっているとは限らないし、要するにはっきり把握された分明的な表現が出来る場合も、そうではない直観的に人間の心のなかで働いている力として存在する場合もある。何れにしても、その判断基準は人間のあり方に深く根ざすものであることは間違いない。

このような判断基準は複数あってもよい。また、判断の基準はそれ自体が言葉や概念で表されるとすれば、分節されていて、意味を持ったカテゴリーの集まりとして規範が語られるであろう。このカテゴリーは実存的カテゴリーと呼びたい。このような意味では規範のインデックスはあり得る。これは善と悪を自分で決めるときの判断基準として働く判断基準が複合的であ

るという意味である。

倫理学の最も重要な意義はこのような判断基準として働く規範のその規範性の根拠を見出すことである。結局、それは人間の実存の構えとすることになるので、人間の実存のあり方が語られる必要があるのである。

倫理学はその意味では、時に「アプリアリ(先験的)」な実存条件を探求する学とも言われる。人間の自己実現の現実的具体的行動は個別的で多様で一つ一つが区別できるできごとであるし、一般的抽象的行動というものはない。しかし、倫理的な人間の構えは実存的には現実的具体的であるが、深い普遍性があるという意味では概念的、あるいはカテゴリー的概念で分節される内容をもっている。このこともまた必然であろう。

行動指針として一定の目的を達成する政策やプランは行動の連鎖のモデルである。これは倫理ではない。倫理的行動としてそこに指定される具体的行動はそれ自体としては行動であっても倫理そのものではない。そうではなくて、行動の流れと纏まり全体に倫理的構えが働いているときに、人間の倫理的構えの実現としての行動指針と呼ばれる。行動指針が倫理規定というかたちになる場合には、その行動指針に倫理的配慮が前提にあって配慮が規範的な判断の元で具体的にモデル化されている。モデルそのものは倫理そのものではないが、人間の実存の構えがその根底にはあるのでそれは倫理的であり得る。

倫理の場は人間の間柄という人間の関係の場である。この場が個としての人間の集まりであることは当然であるけれど場を形成すること自体が人間の実存のあり方に根ざしているのだということを考究しようと思う。

場としての世界

世界とは何か、大きすぎる問題かもしれない。しかし、われわれは自分の世界を持っているともいう。ある場合には、自分の眼差しの及ぶ地平を持っているといってもよいかもしれない。但し、気を付けなければいけないことは、われわれ自身を地平の外に置かないことである。自分はその地平の世界のなかに含まれているのでなければならない。地平の世界の外に自分を置いて地平の世界を対象化するのには、科学的方法という客観である。それはここでは扱わない。というよりそういう扱いは実存的な人間の問題は扱えないのである。

カントは、自分の行為の格律について、それだから定言的命法は、ただ一つある、即ち次に掲げる命題がそれである—『君は、(君が行為に際して従うべき) 君の格律が普遍的法則となることを、当の格律によって(その格律と)同時に欲し得るような格律に従ってのみ行為せよ』という。つまり、自分をその格律の外に置いて例外としてはならないということである。このことは上に述べたことをカント流に自我主観の意思の側から自我の位置を規定している。カントの純粹理性批判では人間の悟性の主観形式の先験的な規定性を問題にした。科学的客観性の人間悟性側の限界である。自我における意思に関しては、道徳形而上学原論で法に従う義務を持つ自我の実践意志が措定する規範としての格律について先のように結論した。

著者は自我主体そのものの位置を何処に位置づけるかに視点を当てる。そうすることによって、むしろ、自我自体が普遍的な場のなかに含まれているので、普遍性の問題よりも主観性そのものの意味をその場から意味づけるようにしたのである。世界は存在するもの全てを含む全体である。この場から生産される可能性の実現が世界のできごとを生じさせる。当然人間の生産する自己実現もそこに入ってくる。これらの存在とそれらの可能性の実現は互いに関わり合うであろう。その関わりは全ては分明ではない。人間に関わることは人間が認識できるであろう。世界について不分明なところはあっても世界は

関わりの内にあるといえれば、世界全体はある秩序があると了解してよい。即ち、全体がわざわざ破滅に向かうようには展開しないであろうということである。熱力学的なエントロピー増大はそういう意味ではエニグマではあるがそれはここで論議しないでおく。

少なくとも世界は全体の場のなかに秩序ある活動を生み出すので、場の全体はそういう可能性を生み出す法則のような秩序があると見なしでよいであろう。その世界の場のなかに人間もいて、したがって、その秩序のなかで人間の活動も生まれてくるのであるから、その普遍的な秩序は人間存在に先駆してあるわけである。人間はこの流れに逆らう必要はない。即ち、秩序への関心は人間にもともとあってよいという根拠がある。但し、その秩序というのは物理法則とか、自然の法則というように枠組みとして前もって与えられているというのではなく、人間の実存的構えが世界という場で関わりを持つところに可能性の自己実現として見いだすところのものである。従って、人間の関わり場の場としての世界を破棄しない方向があるという意識が了解されているという意味での秩序であるから、現実に具体的な人間の活動が予め決められているわけではない。それ故に規範や関わりの内容としての道徳もわれわれのなかに生じるのである。

複雑な生活世界と規則

朝の通勤時のラッシュに混雑する電車の駅の構内を経験した人は多いだろう。慣れている人はその混雑の流れにのって自分の目的とするルートでうまく切り抜けるが、慣れていないと巻き込まれて自分の抜け道がなくて焦ってしまうこともある。人混みは混雑していて一見乱雑で不規則のように見える。ところが不思議に人は互いにぶつかることは少ない。それである程度好きなように歩ける。しかし、空いている通路でも一団の人が通路に広がって喋りながら人の前を進行されると、後ろから来た人はそれを避けて通るのに少し手間取る。これはその集団の変則的な行動がそうさせるのである。これが連続して起これば全体は混乱するに違いない。ラッシュの時にはラッシュの時の流れが出来てそ

れにうまく乗れば適当な道筋があるのと違って、思いもしない変則的な動きがあると混乱するのである。

ラッシュ時でもある流れが出来るのは、その時にある規則で人が動くからである。つまり、勤めにでる人は大体が一定の乗り換えや降り口があってそこに達すれば目的地に着くので、ほとんどの人が同じ規則で動くので一定の流れが出来る。それとは全く違う目的と方向を持っている人は簡単にその流れに乗れない。そのためには自分としては通勤という目的ではないがその場では同じ規則にある程度従えばその場を乗り切ることが出来る。このようなわけで、混雑さは直ちに規則がないことにはならないのである。どんなに複雑な現象の場にもある規則はあり得るということであるし、規則があれば一定の秩序が生まれるということである。

ラッシュ時の一定の流れはラッシュが終わればまたもとのランダムに近い人の往来に変化してしまう。ランダムといっても人は互いにぶつかるわけでもなく、適当な人の流れになっていてそれぞれの人の目的を果たしている。この変化は人のそこで働く人の内部規則の変化である。内部規則というのは、人が心の中で持っている規則であったり目的であったりする。一方では、交通規則のように電車の乗車口では並んで乗車するとか、改札を通過してホームに行くという規則があるが、それは外部規則である。それらの規則が流れの秩序を造り、その規則が変わればその場の秩序は変わってくる。

従って、規則のあり方が大事でこの規則が全くなければ唯の混乱となり、規則のあり方が秩序をもたらすようには働かないとどういうことになるか予想もつかず、また、どうにもならない混雑になる可能性もある。但し、これらの内部規則や外部規則は、暗黙裡にか、あるいは、意識的にか、何れかでその場の人々の間に「相互了解」が成り立っていて、そこから暗黙の内にかあるいは、意識的にか、その方法は決まっていなくても「関わり」が成立して、現実的具体的な関わり方を持った世界が生じる。

われわれの世の中は複雑であり、多様性に富み、何か新しいことが起こりそうであるがそれ

が何時であるかの予想もできないと思う。われわれの世界は自分も含めてそこに何かが生じる。それが何時起こるかも予測できないことが多い。しかし、ある程度の秩序を持っている。それは内部規則や外部規則があるからであろう。その中でわれわれは可能性の実現を自己実現として生産しているのである。その生産が、また現実の具体的世界に影響して周りに関わる。こういうことが重なって複雑で多様ではあるがある程度の秩序を保った生きる場がわれわれの関わり場の場としての日常を形成する。

人間は自然的に衝動、欲望、欲求、望み、性格、気質、好奇心、自己利益追求、心理的なところの変化、理想のような精神的目標などを内に秘めている。これらはわれわれの経験する人間の自然であるといってよい。このような土台を持ったわれわれは、多様と複雑さをもともと当然としながら、全体では先に述べたような規則性と秩序を実現している。現実是不分明さ、困惑すること、未知のこと、対立、矛盾などがあることは承知の上で、このことは主張されてよいと思う。

そこで働く規則がある場合には倫理的規則であってよいわけであって、特に人間はそういう規則を持っていると見なしてよいであろう。そしてこのような規則は相互了解の内にある必要があって、この了解性は人間の共感することに基底があるということが出来る。

実践的倫理の基礎的視点 — 実存的構え —

倫理は人間の関わりとそのかわり方にある。従って、人間関係についていえば、共同存在としての関わりは当たり前に含まれることになる。人の関わりは、四つある。即ち、自分に関わること、他者に関わること、自然に関わること、そして「神」に関わることである。最後の「神」とは、人間の関心の方向に現れる人間が関わる「神」として信ぜられるあらゆる「神」について語られるものである。自分に関わりという場合には、共同性がないように見えるが、一般に自己関心というものは、自分と「つき合う」ことと同じと考えるほうが妥当であろう。

人より自分が可愛いという利己心は、反共同性的だと見なされる場合には、特に共同性が倫理の軸になっていることを示唆するし、丁度それとは反対に他人の目ばかりを気にすることで自分を忘れることも自分自身との正当な関係を度外視するという意味で倫理的とはいえない。

われわれには三つの実存的な特徴がある。

即ち、第一は、人間は配慮と関心の眼差しをもっている積極的な関わりを持つようとする存在である。それによって世界を持った自分として生きている。その中で自分が分かるように存在している。ハイデッガーのいう「世界内存在」である。言葉、労働という行動、そして、相互交流が自分から生まれて、自分の可能性を展開しているが、それらは配慮と関心の方向に眼差しをもっているため、現実的な具体的世界をわれわれは持つことになるが、それには必ず関心と配慮の意味があって価値を感じるものとして現れるのである。その場合に、積極的な善という価値とそれとは反対に悪と見なされるものとの関わりもあり得る。いずれにあっても、関わりとしての世界のなかに自分が見いだされるのである。簡単にいえば、世界のなかでしか自分の可能性の自己実現の本当の姿は見いだされない。

第二は、現在私がここで今生きていることは否定できないが、この現在は、過去、将来、そして未来の連続のなかにある。生きているこの現在自身はその瞬間に姿を現すことが出来ないで、生きていること自体ははっきりしていても、その自分が如何なる現在であるかは行動しているときに直接現れてこない。唯、その現在の前にあった自分、つまり過去の自分が今現在の自分に繋がっていてその過去でこうしようと思ったことが今実現されているのだといってよい。過去の関心の方向が力として現在に働いていて生きている。従って、現在は将来に向かってそこでまた現在が連続して生きている。そのときに、現在の関心や配慮の方向性が力となって働いている。未来は、何が起こるか分からないずっと先のことであって、可能性そのものの無規定な先である。それは、自分が始まる最初の始まりの時と同じである。自分が存在し始め

たそのときと同じである。唯、時間は先に進んでいる。その先に死がある。現在は、生きていることそのこと自体である。現在にとどまることは出来ない以上は、現在にだけ気を止めようとすること自体に無理があつて、時間を失う一つの心理状態は、いくら直接見ようにも見ることの出来ないそのときの瞬間に力を振り絞ることである。急流に逆らつて、岸に泳ぎ着こうとしても泳ぎ着けないようなものである。岸が見えているようであるが実際にはそこにはゆくことは出来ない。現在のなかの配慮と関心の方向は今ではなく、将来に現れる今である。こうして時間のなかの自分が現れる。夢というものはそういうものである。意図は、従って、力として時間を進める価値である。過去は、また、それ故に、現在にとっての力であったともいえる。現在は自分が生きていること自体の保証である。朝に目が覚めたときに生きている実感はそのことである。

末期の癌について余命が告げられるということは、科学や技術の進歩のお陰であるかもしれないが、このことは時間的実存に関していえば、科学の成果と誇りに思う以上に人間の実存に深い影響を持つものであることを知っておくべきであろう。

第三に、われわれは配慮と関心の方向に世界を見だし、自分を見だし、時間のなかで生きている。自分の世界性は、空間と時間のなかにあつて、自分の構えとしての世界とともに自分が生きている。世界のなかにいる自分は世界に対して、その全体について気分をもっている。不安、不条理、希望、絶望、喜び、平和、それらはどういうものかは決定しがたいが、感性的な印象に近い気分を感じているのである。世界はおもしろいと思えば、好奇心のような関心の動力もいるであろう。不安であれば、その気分の理解を求めて世界に対して自分を対応させる。人生に味があるという。味は見えるものでもかたちがあるものでもないが、味があるという。

味は、いろいろなものの要素が味を造り、その要素の一つでも欠けるとその味が変わるように、味は対象の全体を捉える感性である。われわれの世界は全体として了解されている。全体

を分析しても、全てをみていないしそれが可能とは限らないが、味のように全体を捉えている世界に対する私の気分がある。不安と絶望のなかで世界に生きていくとすれば、それはその人の現在がその味に浸されていて、そこから抜け出さずかどうかが重大な関心事になるに違いない。それには将来に希望を持った現在の力によって世界の要素を変える必要があるということであろう。絶望それ自体を乗り越えるという感性そのもの変換が可能であればそれは素晴らしいことである。感性は感情の起伏ではない。自分の世界そのもの全体の味であるから感情的な心理状態とは異なるものである。感情はその感性を助けはするが感性そのものではない。

配慮と関心の向かう方向

あらゆる可能性に無規定に向けられる関心や配慮の眼差しは、あらゆることへの可能性を開示できる人間の存在の仕方を示している、何でも出来るという無規定的な可能性の自由がわれわれの根底にある。これは世の中の複雑さの源泉であるが、複雑さは規則のないことを意味しない。つまり、自分がその関心と配慮の主語であることを知っているという主体性を持っているから、自分が何かをし始めることが分かっているという意味では責任が生じるし、関わるのが配慮の持っている根底であるのだから、この人間の根底が満たされるためには、共同性、あるいは、共感性が成立しなければならないであろう。

このような根底にある無規定な自由な主体性を持った存在は、現実には、規定性を持っている。今生きている世界の規定、過去にあった規定、未来に実現されるかもしれない期待のなかの規定、それらは現実的で実現されている可能性の一つとして自分とその世界を規定している。それらは、配慮と関心の眼差しの方向について、そこに現れてくるものに対する自分の関わり方の自己決定、あるいは自己規定といってもよい。その規定は、自分にとって自分の世界のなかでじっくりくるものでなければならぬであろう。妥当で、よいと感じるものでなければならぬ。即ち、価値あるものであるという情態を感じる

ものでなければならぬ。即ち善であると感じるものでなければならぬ。倫理は、そこにある。

われわれが共同性のある社会を形成する根底は、関わりなしには人の生きる世界が形成されないのであるから、配慮という人間の存在の方向性のなかで人間の互いの眼差しのなかで何が生まれてくるかに強い関心に向けるわけである。その関心の方向のなかで生まれてくる共同存在としての人間社会は、根本的に人間の一人一人の可能性への開示、即ち自己実現を妨げないで、むしろそれを十分に包括しながら、共同存在自体の自己規定としての共同体の実際の形式を発見することになるはずである。制度や法律にはそういう根底がなければならない。

関わりが、妥当な正しい収まり方をしている、世界の世界性が壊されることなく、人間存在が持続する必要がある。破壊される人間存在の世界性は、どのようなことをいうのであろうか。もしそうであるとして、破壊されつつあるということはどこから分かるのだろうか。これは、今現在のところでは気分として、ある不安として以外には感じとれないが、過去から今に現れて来ていることによって、即ち歴史によって知られてくるのである。未来に関しては、今気が付かずに実行していることが現れてくるとき、破壊が現れる。破壊を今くい止めるということは、過去から実現してきた破壊性をくい止めるわれわれの行動によっているのである。自然環境に対する現代の認識は、過去の人間行動の反省に立っている。自然破壊の不安に対して、その不安を除くには、過去の人間の自然に対する対応を変える必要があるということである。

われわれの構えは、変わるときにしか変わらないので、変わっているときにはもう既に事情は変わっていることになる。そういうわけで、われわれの現実、現存在としては関心と配慮の方向に全ての可能性に開示できるようになっているにはいるが、開示する方向についての自分の構えは変わらなければ変わり様はない。そういう不思議な存在なのである。

どのようにわれわれの世界が変わるのかについては法則などない。それが実存という人間存在のあり方である。われわれの今生きている構

えは、現実性として規定されている。ある人は、それを強制のようにも、人から押しつけられているとも感じたりするかもしれないが、そのような実感は、人によって異なる。しかし、異なることのない人間の实存の現存在の根底は、関わり場の場としての配慮と関心の方向性を持った、世界性のなかでのあらゆる可能性へ開示する人間である。われわれが共同存在として関わり場のなかで変わるとすれば、自分としての人間も変わることである。その構えを変える必要がある。変わればそのときに変わる。今このときに自分が変わったということを客観的には眺めることは出来ない。そうではなくて変わった構えの次にきた将来に自分の変化をその将来にとっては過去となる現在に対照して眺めることが出来る。それしかできない。従って、現時点での人間の価値判断は大事である。

進化した生物を進化した生物と見なすためには、現在の生物の状態では何もいうことが出来ない。過去になった状態から、今を見るしかない。将来も進化するかは、分からない。今が過去になってしまう将来にそれが眺められれば、そのときに進化の事実が現れるに違いない。ここでいいたいことは、人間は自分について変化を知ることは今このときには分からないというこ

とと、それ以上に重要なことは、それにも関わらず配慮と関心の方向を持った自分の世界性は全ての人間で同じであり、そういう自分はいつも存在しているということである。その関心の方向に現れてくる自分と親しみを持つことの出来るできごとは、価値として判断されている現実の世界を現し、自分の可能性の実現であるということである。

おわりに

現在われわれが倫理規範として判断の基準を持っている。例えば、生命の尊重、人権の主張、環境への配慮などは人間に普遍的な実存への配慮の方向にある世界へのわれわれの実存的構えの一つとして共感されているのである。福祉の領域で生命の質(QOL)を見定めようとしているが、この課題はなかなか難しい。現在われわれが求めている QOL は今のわれわれの価値観によって作られるので、多様な複雑な世界では QOL は多様であり得る。しかし、その QOL のカテゴリー的な要素の集まりは、人間の实存的構えを基礎にしていて、その時その場の暗黙裡の規則のように働いている社会の現在の生活の理念として働きうることは間違いない。

文 献

- 1) 田島節夫 (1996) フッサール, 講談社学術文庫, 東京.
- 2) ハイデッガー M, 桑木 務訳 (1963) 存在と時間 上・中・下, 岩波文庫, 東京.
- 3) カント E, 篠田英雄訳 (1960) 道徳形而上学原論, 岩波文庫, 東京.
- 4) ベルグソン H, 真方敬道訳 (1979) 創造的進化, 岩波文庫, 東京.
- 5) アリストテレス, 高田三郎訳 (1973) ニコマコス倫理学 上・中・下, 岩波文庫, 東京.
- 6) 関谷 真 (1996) 新版生命倫理と人間の未来, 大学教育出版, 東京.